

# 紀行文学としての『武器よさらば』

日 下 洋 右

*A Farewell to Arms* as Travel Literature

Yosuke KUSAKA

アーネスト・ヘミングウェイ (1899-1961) は、事実や場所や場面感覚が鋭く、地形の描写が綿密で精確であった、とカーロス・ベイカー (Carlos Baker) は指摘している。<sup>1</sup> フィリップ・ヤング (Philip Young) は、ベイカーの見方を裏づける証拠をみつけている。ヘミングウェイの4人目の妻メアリー (Mary) によれば、『移動祝祭日』 (*A Moveable Feast*, 1964) の中で描かれた街路の名称とその距離の精確を期すため、生前ヘミングウェイは妻を伴って、その街路を実際に何度も歩いて確認したといわれるからである。<sup>2</sup>

『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*, 1929) には、ヘミングウェイの場所感覚の鋭さと綿密で精確な描写が、第1次世界大戦中と大戦後に獲得した彼の個人的体験と結びついて、控えめな形をとってはいるが散りばめられており、旅行案内書といえるような場面を作りだしている。事実、『武器よさらば』には、彼がイタリア戦線で負傷後、ミラノのアメリカ赤十字病院へ入院中に獲得した北イタリアに関するガイドブックのような情報がさりげなく取りこまれている。また、ヘミングウェイが『トロント・デイリー・スター』 (*The Toronto Daily Star*) 紙および『トロント・スター・ウィークリー』 (*The Toronto Star Weekly*) 紙の通信員として、ヨーロッパ各地を旅行して見聞し体験して得た情報の一部も、それとなく『武器よさらば』の中に織りこまれている。このように、『武器よさらば』は旅行記の要素を多分に備えているので、紀行文学という側面からもこの小説を検討する必要がある。

チャールズ・フェントン (Charles Fenton) は、ヘミングウェイの読物記事や報道記事に、ユーモア、パロディ、風刺、アイロニーなどの技法を発見しているが、記事の手法が作品にどのように反映しているかに関しては具体的な分析や検討を試みていない。『武器よさらば』にヘミングウェイの新聞記事を中心としたノンフィクションの影響が見られることを具体的に指摘したのは、ロバート・O・スティーヴンズ (Robert O. Stephens) である。

1922年6月中旬、ヘミングウェイは最初の妻ハドリー (Hadley) を伴い、彼が18年から19年にかけて入院していたアメリカ赤十字病院の所在地ミラノから、彼が所属していた傷病兵運搬車隊第4分隊の駐屯地スキオを経て、彼が重症を負った激戦地フォッサルトに至る18年当時のイタリア戦線にまつわる思い出の地を回っている。<sup>3</sup> 再訪中にヘミングウェイによみがえってきた18年の夏の記憶を織りこんだ読物記事の一部は、<sup>4</sup> 物語の冒頭部分で日中に兵士の隊列が埃を巻き上げながら行進し、夜間には兵隊と牽引車に引かれた大砲が通り過ぎてゆく場面と、第7章の汗をかきながら連隊の兵士が通過していく場面に反映されている。<sup>5</sup>

ヘミングウェイは1922年9月下旬に旅行先のドイツの黒い森からパリへ戻ると、8月末に勃発した希土戦争の取材のためコンスタンティノープルへ赴くよう命じられた。世界の注目がトラキアへ転じると、彼は西のアドリアノープルへ向かい、アドリアノープルを通過して西のカラガッチ方面へ疲労困憊した幾千というトラキアのキリスト教徒が、10月の雨の中をマリツァ川を渡って黙々と避難する惨状を目撃する。このとき彼が脳裏に焼きつけた記憶とその一部を描写した報道記事は、<sup>6</sup>『武

器よさらば』の山場であるカポレットの退却の描写に利用されている。<sup>7</sup>

ヘミングウェイは1922年の1月末から2週間にわたって、スイスのモントルーの山中にあるシャンピのホテルに宿泊し、スキーの他にリュージュを試みて、その体験談をカナダの読者に紹介している。そのときの体験とその読み物記事は、<sup>8</sup> 物語の第37章でフレデリック・ヘンリー(Frederick Henry)とキャサリン・バークレー(Catherine Barkley)がマッジョーレ湖を北上してスイス領のブリッサーゴへ上陸後、ロカルノの税関へ送られる途中役人からスイスのウインタースポーツの魅力を聞かされる時のリュージュに関する挿話に生かされている。<sup>9</sup>

マイケル・S・レノルズ(Michael S. Reynolds)も、1920年代初期に書かれたヘミングウェイの旅行記の技法が『武器よさらば』で利用されていることに注目している。旅行記の手法の一つは、旅行案内書として利用できるほど正確な情報に溢れている点である。物語でも北イタリアの地理、ホテル、カフェ、食事、ワインなどの広範囲にわたる情報が正確に盛り込まれている。ヘミングウェイが旅行記で発展させたもう一つの手法は、舞台裏の情報に通じている専門家然とした立場に立って、内部から目立たぬように語るというものである。この方法は専門知識を誇示することなく、ごく控えめに述べる主人公兼語り手の性格と視点に反映されて、その信頼性を確立するのに貢献している。このように、『武器よさらば』の手法は、ヘミングウェイが20年代初期にヨーロッパ各地を旅行して蓄積した豊かな体験の所産である読物記事や報道記事から継承されたものだ、とレノルズは力説しているのである。<sup>10</sup>

『武器よさらば』に認められる旅行記風の特徴は、レノルズも指摘するように、旅行に必要な情報を提供する旅行案内の様相を呈していることである。レノルズは小説の舞台となるミラノやマッジョーレ湖畔やモントルーの町並みが、当時の各々の街路図と比較して驚くほど正確に描かれていることをみつけている。例えば、フレデリックが前線へ戻ることになる夜、主人公と恋人が赤十字病院から駅の向かいのホテルへ行くまでの町並みや道順が、主人公によって旅行案内者のように詳細に語られている。

I went down to the corner where there was a wine shop and waited inside looking out the window. . . . We walked along together, along the sidewalk past the wine shops, then across the market square and up the street and through the archway to the cathedral square. There were streetcar tracks and beyond them was the cathedral. It was white and wet in the mist. We crossed the tram tracks. On our left were the shops, their windows lighted, and the entrance to the galleria. . . . We crossed the far end of the square and looked back at the cathedral. . . . "This is the way I go to the hospital," I said. It was a narrow street and we kept on the right-hand side. . . . We turned down a side street where there were no lights and walked in the street. . . . We walked on along the street until it came out onto a wider street that was beside a canal. On the other side was a brick wall and buildings. Ahead, down the street, I saw a streetcar cross a bridge. . . . We stood on the bridge in the fog waiting for a carriage. . . . "To the station. There's a hotel across from the station where we can go." . . . It was a log ride to the station up side streets in the rain. . . . "Go to the Via Manzoni and up that." (146-51)

フレデリックとキャサリンはスイスへ上陸後、ロカルノの税関の役人からすすめられたホテルに宿泊していたが、キャサリンの出産のことを考慮して病院のあるローザンヌのホテルへ移ることにする。2人が落ち着いたロカルノのホテルよりも豪華なローザンヌのホテルの状況は、旅行案内書

で書かれているように、真鍮の鍵束を上衣の襟の折り返しにつけた門衛、車寄せ、エレベーター、じゅうたん、光った取りつけ具のついている真っ白な洗面器、真鍮のベッド、広々とした居心地のよい寝室、戸外の庭園などに言及されている。

We came into Lausanne and went into a medium-sized hotel to stay. It was still raining as we drove through the streets and into the carriage entrance of the hotel. The concierge with brass keys on his lapels, the elevator, the carpets on the floors, and the white washbowls with shining fixtures, the brass bed and the big comfortable bedroom all seemed very great luxury after the Guttings. The windows of the room looked out on a wet garden with a wall topped by an iron fence. (308)

物語ではホテル事情に加えて、ホテルの選び方に関する情報も与えられている。病状が回復して前線へ復帰する前日に、フレデリックはキャサリンと一夜を過ごすため、ミラノの駅前にホテルをみつけようとする。荷物を携帯していないので、断られるのではないかというキャサリンの懸念は無用である。というのも、これから向かおうとしているホテルでは、手荷物の有無にかかわらず、また二人の関係が問われることなく宿泊できる、とフレデリックは承知しているからである

しかし、オテル・カヴールなら、二人を泊めてはくれないだろう、とフレデリックは語っている。当時オテル・カヴールは、ミラノでも指折りの豪華なホテルであったので、フレデリックはこのような事情を熟知していたことになる。また、フレデリックは脱走後キャサリンを追ってストレーザへ赴いた際には、そこにある2つの最高級ホテルの1つで、300のベッド数を有していたといわれるグラン・オテル・エ・デ・イール・ボッロメ<sup>11</sup>に宿泊しており、彼が高級ホテルの事情に通じていることを示している。

1920年代にヨーロッパ各地を回って身につけたヘミングウェイの豊かな旅行経験は、ホテルの種類だけではなくホテルの作法にも反映している。例えば、フレデリックは食事の注文の仕方や注文すべき料理を心得ている。彼はミラノの駅前のホテルには猟鳥肉が置かれていることを知っており、スフレ・ポテトを添えたヤマシギ料理、クリの裏ごしスープ、サラダ、そしてデザートにサバイヨーネの夕食を注文し、飲み物にカプリ酒とサン・エステフェを選んでいる。

We were very hungry and the meal was good and we drank a bottle of Capri and a bottle of St. Estephe. I drank most of it but Catherine drank some and it made her feel splendid. For dinner we had a woodcock with soufflé potatoes and Purée de marron, a salad, and zabaione for dessert. (153)

フレデリックはホテルに関する情報にとどまらず、ミラノの一流のカフェにも精通している。入院中のフレデリックは松葉杖をついて歩き回ることができるようになると、ガレリア（アーケード商店街）にある高級レストランのピフィやグラン・イタリアへキャサリンと食事にてかける。彼は高級な食事と酒を味わうことができる場所に詳しいことに加えて、飲食物そのものの通でもある。例えば、彼は高級品を味わう酒の通であることがわかる。彼の病室の衣装たんすの中に隠された空き瓶からですら、さまざまな銘酒を味わっている彼の酒通の実態が推察できよう。彼が酒の通であることを証明する極めつけは、熊の形をしたキュンメル酒の空き瓶である。最上のキュンメル酒は、熊が前肢を上げて座った形をした瓶に入っており、ロシア産であると彼は説明しているからである。

グラン・イタリアの給仕長は、酒や食の通としてフレデリックに一目置いている。フレデリック

のために席を取っておいたり、飲食代が足りないときには用立てたりする親切な行為は、給仕長が彼を酒と食の通として尊重し、厚遇しているからに他ならない。

One evening I was short of money and George loaned me a hundred lire. “That’s all right, Tenente,” he said. “I know how it is. I know how a man gets short. If you or the lady need money I’ve always got money.” (113)

このような特別待遇は、彼がその道の事情通であることをも裏づけるのに役立っている。

スイスへ脱出する前日の夕方、フレデリックは同宿のグレッフィ (Grefffi) 伯爵からビリヤードの手合わせを申し込まれるが、前回同様彼は老紳士に敗れ去る。

Count Greffi was ninety-four years old. He had been a contemporary of Metternich and was an old man with white hair and mustache and beautiful manners. He had been in the diplomatic service of both Austria and Italy and his birthday parties were the great social event of Milan. He was living to be one hundred years old and played a smoothly fluent game of billiards that contrasted with his own ninety-four-year-old brittleness. I had met him when I had been at Stresa once before out of season and while we played billiards we drank champagne. I thought it was a splendid custom and he gave me fifteen points in a hundred and beat me. (254)

彼がビリヤードに誘われたこと以上に注目し得る点は、ビリヤードの合間に、ヨーロッパの名高い外交官として一世を風靡した人物と、読書論や人生論や宗教論を対等に交わることができる相手としても、彼が選ばれていることである。この点は、信頼にたる事情通であるというフレデリックの語り手としての重要な役割を一段と強めている。そのうえ、ビリヤードのゲームの途中で酒を酌み交わすシーンは、彼が伯爵から酒の通としても認められていることを示している。

ヘミングウェイは1918年ミラノのアメリカ赤十字病院へ入院中の9月末に、運動療法の実践を兼ねてストレーザへ旅行に出かけているが、宿泊先のホテルで当時99歳になるイタリアの著名な外交官グレッピ (Greppi) 伯爵と出会っている。伯爵は彼にビリヤードの相手をさせたり、年代物のシャンパンを振舞ったり、国際政治の鋭い分析を披露したり、文学談義をしたといわれ、そのときの体験がこの場面に明らかに利用されている。<sup>12</sup>

タリアメント川に飛びこんで単独講和を結んだ主人公は、ストレーザのホテルのバーに設えられた椅子に座って、タリアメント川からさらにピアヴェ川まで後退したイタリア軍の動きを新聞で読みながら、ピアヴェ峡谷の景観を回想している。

The army had not stood at the Tagliamento. They were falling back to the Piave. I remembered the Piave. The railroad crossed it near San Dona going up to the front. It was deep and slow there and quite narrow. Down below there were mosquito marshes and canals. There were some lovely villas. Once, before the war, going up to Cortina D’Ampezzo I had gone along it for several hours in the hills. Up there it looked like a trout stream, flowing swiftly with shallow stretches and pools under the shadow of the rocks. The road turned off from it at Cadore. I wondered how the army that was up there would come down. (253)

レノルズはピアヴェ渓谷の風景描写に続く、「上流まで登った軍隊がどのようにして下ってくるのか疑問に思えた。」というフレデリックのコメントを、1920年代初期のヘミングウェイが単なる旅行作家でなかった証拠の一つとして特筆している。

レノルズはスティーヴンズの見解“Even when he [Hemingway] wrote of events from a vacation trip, he reported the travel adventures as they provided insights for social analysis.”<sup>13</sup>を根拠にして、ピアヴェ川流域の景観の描写を紀行文学にふさわしいが、単なる風景描写にとどまっていないと主張している。スティーヴンズは具体的な旅行記事をあげていないが、ヘミングウェイの社会的分析と批評に基づいた旅行記の例として、ヘミングウェイが1922年から1923年にかけてドイツの黒い森へ釣りの旅行へ出かけたときの体験を踏まえて書いた一連の記事のことを示唆している。それらの記事には、大戦後のドイツのインフレと官僚主義の欠陥に対する社会批判といえるものが底流に潜在しているからである。<sup>14</sup>

その結果、“*A Farewell to Arms* uses the landscape of Italy at war as a crucible containing both action and commentary.”<sup>15</sup>とレノルズは強調し、ピアヴェ川流域の風景描写とイタリア軍の作戦に対するフレデリックの疑念を、スティーヴンズが指摘するヘミングウェイの旅行記の典型的な例とみなしている。

しかし、ピアヴェ渓谷の描写に続くイタリア軍の戦術に対する批評は、単独講和を結んだフレデリックにとって、戦争がそれほど簡単に彼の意識から払拭されないことを示唆したものであり、社会的な分析や批評を意図したものでない。イタリア軍の動きに対する批判は、イタリア軍の作戦に対する疑問を示したものとみるべきであり、フレデリックが軍事方面に精通していることを裏づける証拠なのである。

小説の中でフレデリックが初心者として登場することは一度もない。彼は登場した瞬間に、既に広範囲に渡る知識を習得し、豊富な経験を身につけている。『武器よさらば』は1915年の夏の末から始まって、キャサリンが出産の際に亡くなる18年の春で終わる。主人公はイタリアがオーストリアに戦線布告した15年の夏の末から、17年秋のカポレットの退却まで前線にとどまっていたので、2年間にわたって戦争とつきあっていたことになる。従って、彼が軍事的知識を蓄積していて、軍の内部事情に通じているのも何ら不思議ではない。このように、フレデリックは北イタリアの地理に詳しく、ミラノのような都市やストレーザのような保養地をガイドブックのように熟知している他に、軍事関係の知見をも広く身につけているのである。

実際、小説の中でフレデリックが玄人はだしの専門知識を備え、内幕の情報に通じている顕著な領域の一つは軍事に関することである。彼が軍事面に明るいため、読者は語り手を信頼して彼の語るイタリア戦線の推移をそのまま受け入れることができるのである。彼は外国人であり、当時のイタリアのイデオロギーに共鳴し、傷病兵運搬車隊の操縦兵としてイタリア軍に身を投じたにすぎないため、軍事方面についてはずぶの素人だったはずである。しかし、彼は2年間にわたって前線に出入りしていた経験から、小説に登場する頃には戦況や作戦を読む軍事的能力を獲得していたのである。彼は戦略や戦術に精通するようになったため、まるで軍事専門家のように戦術の誤りを指摘したり、自己の戦略を説いたりする。例えば、彼は膝の傷が癒えて前線へ復帰したとき、山岳戦が不利なことを力説して、部下と戦略論争を展開しているが、彼の主張には戦略の研究家の一面が発揮されている。

I meant tactically speaking in a war where there was some movement a succession of mountains were nothing to hold as a line because it was too easy to turn them. You should have possible mobility and a mountain is not very mobile. Also, people always over-shoot

downhill. If the flank were turned, the best men would be left on the highest mountains. I did not believe in a war in mountains. I had thought about it a lot, I said. You pinched off one mountain and they pinched off another but when something really started every one had to get down off the mountains. (183)

同じ主張は既に第19章にも見出される。入院中のフレデリックは戦況を報じる新聞記事を見て、イタリア軍が山岳戦では勝利を見出せないであろうと結論づけているからである。彼の持論はナポレオンがヴェローナ周辺でオーストリア軍を撃破したように、平地で決着をつけるべきだということなのである。

Napoleon would have whipped the Austrians on the plains. He never would have fought them in the mountains. He would have let them come down and whipped them around Verona. (118)

このように、彼は戦略や戦術に精通した軍事専門家のような能力をも備えた人物として描かれている。従って、ピアヴェ峡谷の上流へ進軍したイタリア軍の軍事行動に対する批判は、ヘミングウェイの読物記事の根底に流れている社会的な洞察の延長線上にある批評ではない。これは主人公に軍事専門家然とした印象を付与して、戦闘状況を語る主人公が語り手として信頼にたる人物であることを、読者に信じこませようとする作者の戦略とみるべきである。

『武器よさらば』の中で、フレデリックが主人公兼語り手として読者の信用を勝ち得ているもう一つの重要な点は、経験豊かな釣り師としての役割である。物語では彼は釣りに対する人並み以上の関心や知識を持ち合わせ、釣り場となる川の地形を読む確かな目を備えている。しかし、この種のフレデリックの特質は、出来事という生地にごく控えめに織りこまれていることが多い。例えば、フレデリックが負傷して野戦病院へ入院中、見舞いに訪れた司祭は戦争が終結すれば、帰りたいと願っている故郷アブルッツィの地方色をフレデリックに話して聞かせる。その中で司祭は、“At Capracotta . . . there were trout in the stream below the town.” (73) と語るが、川と魚に対する言及は主人公が他の登場人物から、釣りに関心が深くて詳しい人物と受け取られていることを明らかに示している。

入院中のフレデリックは10月4日から3週間の予後休暇を取った後、前線に復帰するようとの通知を受け取る。彼はキャサリンと連れ立って、マッジョーレ湖の入江を挟んでストレーザの真向かいに位置するパランツァへ休暇を過ごすために出かける計画を立てる。保養地として有名なストレーザを避けてパランツァを選んだ理由の一つは、ストレーザがミラノから容易に行けるため、顔見知りの人と出会う可能性が大きいものに対して、パランツァがあまり人の行かない所であるため、その可能性が少ないからである。この点からも、彼が北イタリアの保養地の地理や情報に詳しい人物であることがわかる。

実際、彼はパランツァが美しい村であることも、紅葉の名所であることも、そこには散策用の道があることも、そこから漁師の住んでいる島まで船を出せることも、最も大きな島にはレストランがあることも承知している。しかし、彼がパランツァを選択したもう一つの理由は、湖上でヒメマス釣りができることである。

We had planned to go to Pallanza on Lago Maggiore. It is nice there in the fall when the leaves turn. There are walks you can take and you can troll for trout in the lake. (142)

ここでは、釣りが休暇旅行の大きな動機となっていることがわかる。もっとも、彼は黄疸にかかって、その旅行計画は実現されずに終わってしまう。

虚構と異なって、史実ではこの計画が実現されている。しかし、ヘミングウェイが出かけた所は、パランツァでもなければ、彼と行動を共にした人物は、キャサリンのモデルとされたアグネス・フォン・クロウスキー (Agnes von Kurowsky) でもない。彼は9月までに膝の傷がかなり癒えて松葉杖か杖をつけて歩けるようになると、入院仲間であるミネソタ州出身の青年ジョン・W・ミラー (John W. Miller) と二人で、マッジョーレ湖の西岸に位置するストレーザのグラン・オテル・ストレーザへ、9月24日から10日間の予後休暇を過ごしにでかけている。

この休暇旅行で彼が得た収穫は、ミラーに漕がせはしたが、マッジョーレ湖でボートに乗ったことである。ボートに乗った体験は、湖とその周辺の地理を把握するのにガイドブック以上に役立ち、フレデリックとキャサリンがボートでストレーザからスイスへ脱出する場面に活用された可能性が十分あるからだ。<sup>16</sup>

タリアメント川へ飛び込んで銃殺から免れたフレデリックは、勤務先を移動したキャサリンを追ってストレーザへ向かう。二人をストレーザへ集結させるのは、もちろんそこが彼らをスイスへ脱出させる拠点として都合がよいからである。二人がマッジョーレ湖を経由してスイスへ越境しようとするためには、フレデリックはストレーザを含めたマッジョーレ湖周辺の地理的情報に詳しい人物でなければならない。その条件を整える手段として、ストレーザに彼の馴染みのホテルと馴染みの人物が用意され、そこを拠点に彼はマッジョーレ湖で釣りを体験していたという手法がとられている。

このホテルに二人が宿泊してからスイスへ逃避行するまでのプロセスが、読者からごく自然に受け入れられて、唐突に思われなくようにするため、巧妙な創意工夫が凝らされている。彼がこれまで幾度か宿泊していて、このホテルの酒場のバーテンの知己を得ているという設定もその一つである。というのも、警察に追われている身には、知り合いのいるホテルの方が安心できるからであり、万一のときには知り合いから情報の提供や逃亡の援助などの便宜をはかってもらえるからである。

The Grand-Hôtel & des Isles Borromées was open and several small hotels that stayed open all the year. . . .

I took a good room. It was very big and light and looked out on the lake. . . . The hotel was very luxurious. I went down the long halls, down the wide stairs, through the rooms to the bar. I knew the barman and sat on a high stool and ate salted almonds and potato chips. The martini felt cool and clean. (244)

フレデリックはミラノのグラン・イタリアで、給仕長から受けた厚遇をこのホテルでも受けている。というのは、ホテルの酒場のバーテンもフレデリックも、酒と釣りの通として互いに認め合っている間柄であるからだ。

“Have you [the barman] been fishing?”

“I’ve caught some beautiful pieces. Trolling this time of year you catch some beautiful pieces.” (244)

目下の状況では、酒よりも釣りが重大な意味を担っている。フレデリックがマッジョーレ湖で、単独あるいはバーテンと一緒にたびたびボートを使って釣りを試みていることを示唆している点

は、彼がボートで湖を渡ってスイスへ越境することを、読者にごく自然に受け入れさせる役割を果たしている。彼がこの湖でボートに乗って釣りの体験をしていなければ、湖とその周辺の地理に不案内なままのため、急遽彼がスイスへボートを漕いで渡るのは、不自然で説得力を欠くものとなるからだ。従って、釣りは彼が湖を渡って、スイスへ脱出する伏線として巧妙に利用されているのである。その意味では、逃避行の前日にバーテンとフレデリックとが試みた釣りが流し釣りであったことは、作者の戦略の中でも特筆に値する。

“What are you [the barman] doing now?”

“Nothing.”

“Come on out fishing.”

“I could come for an hour.”

“Come on. Bring the trolling line.” (254)

フレデリックが釣りを趣味としており、二人が親しい釣り仲間であることは、フレデリックがマッジョーレ湖を訪れて、何度か釣りを楽しんでいたことを意味している。この事実は、この湖のイタリア側の地形や、島と島あるいは島と湖岸との位置関係や距離などが、彼の頭の中にしっかり入っていることを示している。特に、この日の釣りがボートを利用した流し釣りであった点は、主人公に湖の地理的状况をいっそう精確に把握させるのに貢献している。流し釣りはボートが湖上を一定速度で絶えず移動するので、湖とその周辺の地形や距離を頭に入れるには、きわめて好都合であったからである。このように、フレデリックがスイスへ脱出する前日に、二人が流し釣りを試みた点には、作者の用意周到な戦略が潜められているとみてよい。

The barman put on a coat and went out. We went down and got a boat and I rowed while the barman sat in the stern and let out the line with a spinner and a heavy sinker on the end to troll for lake trout. We rowed along the shore, the barman holding the line in his hand and giving it occasional jerks forward. (254-55)

岸に沿ってフレデリックがボートを漕いだという表現には、特に注意を向ける必要がある。彼が荒天の中をスイス領へ向かってボートを漕いでいるときには、嵐のために方向を見失わないように、湖岸に沿ってボートを漕いで行く部分が多く、その成否は岸との距離が決め手になるからである。

Stresa looked very deserted from the lake. There were the long rows of bare trees, the big hotels and the closed villas. I rowed across to Isola Bella and went close to the walls, where the water deepened sharply, and you saw the rock wall slanting down in the clear water, and then up and along to the fisherman's island. (255)

湖上を移動するボートから湖岸を眺望している描写は、彼が湖をわたってスイスへ向かう逃避行に備えて、ボート上から岸辺の目印となる並木やホテルや別荘を眺め、ボートと岸との安全な距離を掴もうとしているかのようである。彼が流し釣りの往路をベラ島へ向かって漕ぐ点も見逃すことはできない。翌日彼がスイス領へ向かうときにも、最短距離をとるため、湖の沖へ一度出してからベラ島を目指して漕ぎ出さなければならないからである。しかも、漕ぎ手のフレデリックがベラ島までの水中の地形や深度にも注目している点は、まるで当日の脱出の事前調査を実施しているかのよう

である。

“No. Row to Isola Bella. Then on the other side of Isola Madre go with the wind. The wind will take you to Pallanza. You will see the lights. Then go up the shore.”  
(269)

パランツァまで行けば、街の灯火が見えるというバーテンの台詞も周到である。ここで、フレデリックがパランツァへ休暇旅行に出かける計画を立てながら、それが実行に移されなかった場面が想い起こされよう。作者がその旅行計画を実現させなかった理由は、パランツァがスイスへ向かう途中の目印にすぎないため、作者はフレデリックがその街を熟知しているという事実以上の情報を読者に提示する必要がなかったからである。また、彼がその街を知悉している点は、実は脱出の日の重大な出来事の伏線として抜かりなく準備されたものであることがわかる。フレデリックが保養地パランツァ周辺の地理に詳しいことを十分承知しているので、バーテンはパランツァの街の灯りを目指すようにと指示するのである。

このように、フレデリックがマッジョーレ湖の地理的状况に精通していることをバーテンは十分認識しているので、スイスに至るまでの方向やスイス領までの距離(35キロあり、ボートで7時間かかる。二人は前日の夜中の11時に出発したので、翌朝の6時頃にスイス領に到達したことになる。)を逐一説明する必要がない。彼はスイスの方角と距離について念を押すだけで十分なのである。フレデリックはパランツァから北の地域を訪れた形跡がないので、パランツァ以北の陸上部分の地理については明るくない可能性がある。しかし、湖上で釣り、特に流し釣りを幾度か経験していることから考えると、地理感覚の鋭いフレデリックは、湖上から眺めたパランツァ以北の地勢も、かなり把握していたとみてよいであろう。それ故、バーテンは念のため、“Past Luino, Cannero, Cannobio, Tranzano. You aren't in Switzerland until you come to Brissago. You have to pass Monte Tamara.”(268)とパランツァ以北の地名をあげるだけなのである。

嵐の中で決行される逃避行の成否は、必ずベラ島まで漕いで、目印となるパランツァの街の灯火を見つけ、そこから湖岸沿いに北上することがポイントになるので、前日の流し釣りは翌日の逃避行の伏線として、入念に計算された出来事といえよう。

このように、『武器よさらば』に認められる旅行記の特徴は、旅行案内として利用できるほど精確な情報が出来事という生地の中に巧妙に織りこまれていることの他に、主人公兼語り手が消息通とされていることである。マッジョーレ湖周辺の地理に明るく、釣りに精通している主人公が、ストレーザからスイス領へ脱出する場面には、この特質が遺憾なく発揮されているとみてよい。

#### 注

1. Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (New Jersey: Princeton U.P., 1963) 48-58.
2. We know, again via Mrs. Hemingway, how she and her husband walked over and over the routes he walks in this book, partly to check their accuracy. Everything must be absolutely and exactly right. Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: The Pennsylvania State U.P., 1966) 290.
3. Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969) 93-94. Hemingway returned to Italy with Hadley in June 1922 for a disappointing visit to his war sites: Schio, Lake Garda, Mestre and Fossalta. Jeffrey Meyers, *Hemingway: A Biography* (New York: Harper & Row, 1986) 96. Pursuing remembrances of things past still further, the travelers [Hemingway and Hadley] took a bus from Milan to Schio and went on from there by

- train and hired car to Fossalta. Unfortunately, neither town was recognizable to him, Schio because it was a much meaner place than the erstwhile lieutenant remembered and Fossalta because its devastated center had been rebuilt in offensively bad modern taste. The final blow to nostalgia came when their driver drove them out along the Piave and Hemingway couldn't find a single trench or dugout anywhere near the spot where he had been wounded. Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge: Harvard U.P., 1987) 178.
4. "A Veteran Visits the Old Front, Wishes He Had Stayed Away," *The Toronto Daily Star*, July 22, 1922, in *Dateline: Toronto*, ed. William White (New York: Charles Scribner's Sons, 1985) 178.
5. 『武器よさらば』の第1章の冒頭と第7章には、次のように描写されている場面がある。Troops went by the house and down the road and the dust they raised powdered the leaves of the trees. The trunks of the trees too were dusty and the leaves fell early that year and we saw the troops marching along the road and the dust rising and leaves, stirred by the breeze, falling and the soldiers marching and afterward the road bare and white except for the leaves. (3) I had been driving and I sat in the car and the driver took the papers in. It was a hot day and the sky was very bright and blue and the road was white dusty. I sat in the high seat of the Fiat and thought about nothing. A regiment went by in the road and I watched them pass. The men were hot and sweating. (33)
6. "A Silent, Ghastly Procession Wends Way from Thrace," *The Toronto Daily Star*, October 20, 1922, in *By-Line: Ernest Hemingway*, ed. William White (London: Collins, 1968) 72.
7. 『武器よさらば』では、退却の場面の一部が次のように描かれている。The retreat was orderly, wet and sullen. In the night, going slowly along the crowded roads we passed troops marching under the rain, guns, horses pulling wagons, mules, motor trucks, all moving away from the front. There was no more disorder than in an advance. (188) In the night many peasants had joined the column from the roads of the country and in the column there were carts loaded with household goods; there were mirrors projecting up between mattresses, and chickens and ducks tied to carts. . . . On some carts the women sat huddled from the rain and others walked beside the carts keeping as close to them as they could. . . . The road was muddy. . . . (198)
8. "Flivver, Canoe, Pram and Taxi Combined in the Luge, Joy of Everybody in Switzerland," *The Toronto Star Weekly*, March 18, 1922, in *By-Line: Ernest Hemingway*, ed. William White (London: Collins, 1968) 42.
9. 『武器よさらば』では、スイスのリュージュのことが税関の役人の対話をとおして語られている。  
 "There is no winter sport at Montreux."  
 "I beg your pardon," the other official said. "I come from Montreux. There is very certainly winter sport on the Montreux Oberland Bernois railway. It would be false for you to deny that."  
 "I do not deny it. I simply said there is no winter sport at Montreux."  
 "I question that," the other official said. "I question that statement."  
 "I hold to that statement."  
 "I question that statement. I myself have *luge-ed* into the streets of Montreux. I have done it not once but several times. Luge-ing is certainly winter sport."  
 The other official turned to me.  
 "Is luge-ing your idea of winter sport, Sir? . . ." (282)
10. Michael S. Reynolds, *Hemingway's First War: The Making of "A Farewell to Arms"* (New Jersey: Princeton U.P., 1976) 223-37.
11. Gran Hôtel des Iles Borromées, 1/2 M (iles) to the N (orth) W (est) of the pier, with garden, 300 beds. . . . Karl Baedeker, *Switzerland together with Chamonix and the Italian Lakes* (New York: Charles Scribner's Sons, 1922) 493.

12. この事実は、次の伝記の一部から明らかにされる。Late in September he [Hemingway] went further afield for a holiday at the Gran Hotel Stresa on Lago Maggiore. His companion was a Minnesota boy named Johnny Miller. . . . They were adopted by a small, elderly Italian, the Conte Giuseppe Greppi, an “uomo politico” with lengthy diplomatic experience who seemed eager to discuss American politics. It was Ernest’s later boast that the Count had “brought him up politically.” They played at billiards in the game room of the hotel, and the Count provided successive bottles of well-iced champagne. Ernest reveled in being adopted by Italian nobility. He was full of gay talk and literary opinions. Baker, *Ernest Hemingway : A Life Story* 51.
13. Robert O. Stephens, *Hemingway’s Nonfiction : The Public Voice* (Chapel Hill : North Carolina U.P., 1968) 65.
14. 例えば、ドイツのインフレと釣りの許可をそっけなく拒否するドイツの役人のいかにも官僚的な態度とを皮肉まじりに伝えた 1922 年 9 月 2 日付の『トロント・デイリー・スター』紙の記事 “Once Over Permit Obstacle, Fishing in Baden Perfect” やドイツのインフレと溪流釣りの許可を得る手続きの複雑さを伝えた 1923 年 11 月 17 日付の『トロント・スター・ウィクリー』紙の記事 “Trout Fishing All across Europe: Spain Has the Best, then Germany.” で言及されている。
15. Reynolds 224.
16. ヘミングウェイはボートに乗った他に、ストレーザからアプト式鉄道に乗ってモッタローネ山に登り、そこからマッジョーレ湖やアルプスの山々のすばらしい景観を一望している。彼はモッタローネ山からマッジョーレ湖の全体像を頭に入れることができたであろう。また、彼はイタリア領からスイス領へ到る湖岸の地形の大きな特徴も目に焼きつけたはずであろうし、カンノビオ、ブリッサーゴ、ロカルノなどの主な町の位置もおおよそ確認できたであろう。

#### 参考文献

1. Baedeker, Karl. *Switzerland together with Chamonix and the Italian Lakes*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1922.
2. Baker, Carlos. *Hemingway : The Writer as Artist*. New Jersey : Princeton U.P., 1963.
3. ——— *Ernest Hemingway : A Life Story*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1969.
4. Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway : The Early Years*. New York : Octagon Books, 1954.
5. Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1929.
6. ——— *A Moveable Feast*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1964.
7. Lynn, Kenneth. *Hemingway*. Cambridge : Harvard U.P., 1987.
8. Meyers, Jeffrey. *Hemingway : A Biography*. New York : Harper & Row, 1986.
9. Reynolds, Michael. *Hemingway’s First War : The Making of “A Farewell to Arms.”* New Jersey : Princeton U.P., 1976.
10. Stephens, Robert O. *Hemingway’s Nonfiction : The Public Voice*. Chapel Hill : North Carolina U.P., 1968.
11. White, William. *By-Line : Ernest Hemingway*. London ; Collins, 1967.
12. ——— *Dateline : Toronto*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1985.
13. Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. University Park ; The Pennsylvania State U.P., 1966.